

次期学習指導要領への期待 ③ エビデンスで語る授業づくりへ

次期学習指導要領の公表が目前に控えています。そして、この4月からは新しい基準にそって、新たな授業づくりがスタートすることになります。中でも、三つの柱で示されたこれからの子供に期待される資質・能力の育成を目指していくためにはどのような授業づくりが期待されているのか…その見極めと実現へのアプローチの仕方を確かなものにしておくことが大切です。これまでの本通信では前者の授業づくりの改善の具体的視点について整理してきましたが、今回は、後者の授業の質をいかに高めていくかの方策について確認しておきたいと思います。

これまで新基準を踏まえた学びでは、「まとめが変わる」「子供がコンテキストを明確に描いて解決にあたる」「見方・考え方の成長を支援する」などと、問題解決学習に質的向上が期待されていることを述べてきましたが、このことは同時にそれらの営みがねらい通りに実現しているのかの確認も必要であることも意味しています。つまり、「教師がいかに教えているか」という教材研究の質的転換や指導方法の工夫・改善だけではなく、「子供がいかに学んでいるか」という子供のより正しい評価が重要であるということです。

算数・数学ならではの三つの柱の資質・能力がいかに育成され、数学的な「見方・考え方」がどのように成長しているのか、それに向けて子供はどのような思考を連続させているのかなど、これまで以上に子供を見つめる視点をしっかりと確認していく必要があります。「何を知ったのか、何ができたのか」から「知っていること、できることを使った何を解決したのか」というとらえが必要になり、問題解決過程でどのような「見方・考え方」が機能したのか、問題解決によってそれがどのように成長したのかという確認が必要になるわけです。また、学びの過程や終末でコンテキストを見直したり辿り返したりして、自らの成長をいかにとらえているかといった確認も求められるでしょう。

まさに、子供の真の姿を正しくとらえてそれをもとに授業を評価する、つまり子供の成長をエビデンスで語るができるかが鍵になると言えるでしょう。守備範囲の広い三つの柱の資質・能力が育成されていることは何をもって明らかにするのか、抽象的概念でもある「見方・考え方」の成長の様子はどのように子供を観てとるのか、さらには問題解決過程で教師と子供とがコンテキストを描く様子をどう把握するのかといったことが大切になるわけです。これらはすべて授業分析の在り方を見直す視点であることは言うまでもありません。子供の学習成果をどのように見つめるのかといった方法論的な意味合いとともに、子供の学びの成果を成長の様子でとらえるといった目的論的な意味合いからの問い直しが必要とされています。また、子供の姿容を単位時間で確認していくことから単元やもっと長期的なスパンで確認していくといった評価の有効性・実効性といった価値からも再確認することが求められています。

次代を担う子供をいかに育てていくのかという今回の基準改訂は、子供の成長の確認には、エビデンスで語るという極めてあたり前な正面突破の方法をとることが必要であることを告げ、私たちにそれに真摯に取り組むことを期待しているのでしょう。(2017/02/01)